

語用論・社会言語学研究の現状と展望

洪珉杓*

〈 Abstract 〉

Current Trends and Prospects of Studies on Japanese Pragmatics and Sociolinguistics

This study explores the recent research trend in Japanese pragmatics/sociolinguistics by analyzing 110 research articles that were published in 18 academic journals in Korea between 2017 and 2018. As a result, it was revealed that more collaborative researches (25.5%) and contrastive researches (53.6%) were actively undertaken in the area of pragmatics/sociolinguistics than in any other areas. Further, popular research topics were discourse analysis or speech act such as analysis of dialogue in a first-meeting situation, speech acts of listeners, etc. In particular, there were many researches on linguistic landscape, online responses (*kuchi komi*) analysis, *uchi kotoba* (*E-moji*, mobile phone messages, chats and SNS, etc.) in recent publications. A variety of data, which included recorded materials, survey results, scenarios of movies and TV dramas, SNS messages (Twitter, Kakao Talk, Line, Face Book, *kuchi komi*, etc.), corpus, translated materials, TV talk programs, etc., were used for the analysis. Korean researchers preferred to write their articles in Japanese (54.1%) than in Korean (45.9%).

Field : Sociolinguistics

Keywords : Pragmatics, Sociolinguistic, Contrastive researches, Discourse analysis, Current trends

1. 社会言語学の背景

言語学は20世紀に入ってから近代言語学の父と言われるソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)によって本格的に研究され始めた。ソシュールは、言語を体系自体として考察する科学を内的言語学(internal linguistics)、体系とは直接関係を持たない民族史、政治史、地理的拡大などと言語との関係を考察する科学を外的言語学(external linguistics)と呼び、前者が後者に優先すると言った。社会言語学は、言語の体系や構造よりは言語記号と外的条件との関係を考察するという点で、ソシュールが言う外的言語学に該当する。しかし、それ以降の言語学の関心はソシュールが指摘したように内的言語学が中心になり、外的言語学は関心の対象になれなかった。その後、1940年から50年代にかけて米国の構造主義言語学が主流となり、1950年代後半から現在に至るまでチョムスキー(Avram Noam Chomsky, 1928-)を中心にした変形生成文法(Transformational Generative Grammar)と社会言語学(Sociolinguistics)が言語研究の2つの山脈になっている。チョムスキーが言語能力(competence)と言語運用(performance)を区分し、言語能力の究明が言語学の重要な課題であると同時に目標であることを標榜し、その熱気が世界の言語学界を支配している際、社会言語学はそれと対立する形で登場し始めた(洪珉杓, 2010)。

社会言語学という述語自体は、英語のsociolinguisticsを直訳した言葉で、従来の文法中心の言語研究

* 啓明大学校 教授、社会言語学

に対する限界を批判し、言語と社会との関係を具体的に解明するという趣旨の下、1960年代後半に米国で始まった応用言語学の一分野を指す。すなわち、社会言語学は各々の個人が属する集団の言語運用と言語現象を社会との関係の中で把握するという特徴を持っている。

一般に言語の研究対象は言語記号体系とその体系をどのように用いて他人とコミュニケーションをするかという言語行動面に分けて考えることができるが、社会言語学は実際に使われている言語からデータを集め、多様な言語使用の実態を実証的に把握しようとする立場にあるため言語行動の研究に該当すると考えられる。すなわち、社会言語学は言語という現象を社会と結び付けて捉えるとともに、年齢差、性差、地域差などに見られる様々な言語現象に注目するという特徴を持っている。

言語研究は最近まで言語そのものを文法、意味、語彙、音韻などに分けて研究する傾向が強かった。しかし、言葉を使う人間が社会の中で生きていく以上、言葉の成立や運用に社会や文化の影響を受けるのは当然であろう。特に、現代の複雑な社会の中で言葉を社会と分離して研究するだけでは解明できない言語問題が増加している。そのような意味で、社会言語学こそ言語研究の核心であるという主張もある。

2. 語用論と談話分析

近代記号学を作ったチャールズ・W・モリス(Charles W. Morris, 1903-1979)は記号学の研究分野を3つに考えた。すなわち、記号と世界の間を研究する分野を意味論(semantics)、記号と記号とのつながりを研究する分野を通辞論(syntax)、そして記号が人々にどのように使われるかを研究する分野が語用論(pragmatics)と命名した。すなわち、語用論とは、記号または言語が人々にどのように使われるか、それが使用されるコンテキストとそれを使う人々によって記号の意味がどのように変わるかを研究する言語学の一分野である。例えば、友人に「〇〇の電話番号を知っている？」と聞いた場合、これは知っているかどうかを聞くものではなく、知っているならば「教えてほしい」という依頼の意味として伝達される。また、外から入った人が「暑い、暑い！」と言え、中にいた人は冷房を付けるか窓を開ける。このように発話された場面や文脈によって指示対象や伝わるメッセージが変わるが、このような現象が語用論の研究対象となる。すなわち、「語用論」はことばによって伝えられる発話(utterance)とその意図(intention)との関係を、話し手(speaker)、聞き手(hearer)、コンテキスト(context)、指示対象(reference)などを考慮しながら分析する言語学の一分野である。ソシュールによれば、語用論はパロール(parole)の言語学として、構造としてのことばに焦点をあて、音韻、意味、語彙などの言語記号システムそのものの仕組みを分析するラング(langue)の言語学を補完するものであると言える。すなわち、道具の構造や名称を覚えるだけではその道具をうまく使えない。道具の構造や名称とともにその道具の使い方を覚える必要がある。ことばも同様に、文法、語彙、音韻などのルールを理解するだけでは、コミュニケーションがうまくいくとは限らない。ことばの使用で最も大切なことはそれがどのような文脈で使われるのかということである。つまり、実際の状況にあうことばの使い方を覚える必要がある。このように、ことばの使い方という観点からコミュニケーションという現象を見ていくのが語用論なのである。語用論の分野は広範囲にわたるが、その中心的な課題として、発話行為(speech act)と談話分析(discourse analysis)がある。

複数の文が一つの整理された形態で展開された言語単位を談話(discourse)、テキスト(text)、あるいは

文章という。これらはほとんど同じ意味で使われるが、通常、談話は話しことば、テキストと文章は書き言葉を指すのが普通である。また、談話は主に英米言語学で、テキストはドイツなどのヨーロッパで使われる傾向が強い。文章は伝統的な日本国語学の単位である。談話分析、テキスト言語学、文章論と呼ばれる分野は、このような単位の言語現象を研究することである。例えば、

A: 三浦選手がまた決勝点を決めた。

B: {○この/×その/○あの}選手は苦しいときに本当に頼りになる。

上の例文で指示辞の選択は、前後の文脈を把握しなければ選べない。すなわち、文脈からみるとAとBは指示対象の「三浦選手」を互いに知っているので「その」は適切でなく、「この」と「あの」が適切であることがわかる。このように指示詞、接続詞、省略、繰り返し、主題、情報構造などは文レベルでは説明できない。すなわち、ある文に生じる文法的現象は、一つの文レベルの要因だけでは説明できない場合がある。一般に、統語論や形態論のように、文の内部構造を扱う分野を文法といい、文を越えたレベルの現象を分析する分野を談話文法あるいは談話分析という(洪珉杓他 2010)。

3. 語用論/社会言語学分野の研究動向

3.1 調査概要

本稿は、2017年1月から2018年12月まで韓国で発表された語用論/社会言語学分野の論文を調べ、この分野の研究動向を把握し、これをもとに今後、韓国における語用論/社会言語学研究の課題と研究方向を模索してみることを目的とする。具体的には、語用論/社会言語学分野の論文数および年度別推移、共同研究と対照研究の実態及び年度別の推移、著者の国籍別論文作成言語の実態と国籍別分布などを把握する。また、最近二年間、語用論/社会言語学分野で発表された論文のなかで注目し値するものを取り上げて紹介する。

調査対象の学術誌および論文は韓国研究財団の中分類で「日本語と文学」に分類された18の登載学術誌の中で2017年1月から2018年12月まで発表された語用論/社会言語学関連論文である。ただし、調査期間に掲載された論文であっても、寄稿論文、特別論文、招請論文のような依頼論文は除外する。

3.2 調査対象学術誌

〈表1〉 調査対象学術誌及び語用論/社会言語学論文数の順位

No.	発行機関	学術誌	発行回数 (年)	対象巻 (号)	語学論文 掲載数	語用論/社会言 語学論文数(%)
1	韓国日本語学会	日本語学研究	4回	51-58	70	18(25.7)
2	韓国日本学会	日本学報	4回	110-117	41	7(17.1)
3	韓国日本言語文化学会	日本言語文化	4回	38-45	67	11(16.4)
4	中央大日本研究所	日本研究	4回 ¹⁾	44-49	31	5(16.2)
5	檀国大日本研究所	日本学研究	3回	50-55	20	3(15.0)
6	漢陽大日本学国際比較研究所	比較日本学	3回	39-44	45	6(13.3)
7	韓国日語日文学会	日語日文学研究	4回	100-107	76	10(13.2)
8	韓国日本語教育学会	日本語教育	4回	79-86	55	7(12.7)
9	東アジア日本学会	日本文化 研究	4回	61-68	33	4(12.1)
10	大韓日語日文学会	日語日文学	4回	73-80	61	7(11.5)
11	韓国日本文化学会	日本文化学報	4回	72-79	45	5(11.1)
12	日本語文学会	日本語学	4回	76-83	64	7(10.9)
13	韓国日語教育学会	日本語教育研究	4回	38-45	97	9(9.3)
14	韓国日本近大学会	日本近大学研究	4回	55-62	51	5(9.8)
15	韓国日本語文学会	日本語文学	4回	72-79	38	4(8.3)
16	韓国外国語大日本研究所	日本研究	4回	71-78	27	2(7.4)
17	高麗大グローバル日本研究院	日本研究	2回	27-30	7	0(0.0)
18	翰林大日本学研究所	翰林日本学	2回	30-33	1	0(0.0)
合計			66回(平均 5.5回)	-	829 ²⁾	110(13.3)

〈表1〉を見ると、今回の調査対象学術誌の発行機関は6つの大学研究所と12の学術団体となっている。学術誌の発行回数の合計をみると、1年に66回(1カ月平均5.5回)の日本関連の学術誌が発刊されていることが分かる。また、今期に829本の語学論文が発表されており、そのうち語用論/社会言語学論文は110本(13.3%)となっている。学術誌別に語用論/社会言語学論文数をみると、韓国日本語学会の学術誌に18本(25.7%)の論文が掲載されており、最も高い割合を見せている。次いで韓国日本学会、韓国日本言語文化学会、中央大、檀国大、漢陽大の研究所で発行している学術誌の順に語用論/社会言語学論文の割合が高くなっている。

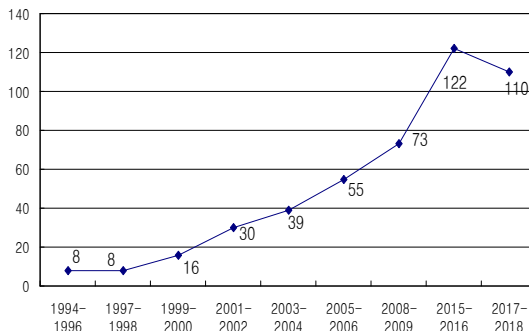
1) 2018年から2回発行

2) 本稿のデータ(表1-表7)は、2017年1月から2018年6月までの研究現況を調べた洪珉杓(2018)のデータに今回2018年7月から12月までの研究現況を追加で調べたデータを合算したものである。

3.3 論文数の年度別の推移

〈表2〉 約25年間(1994-2018)語用論/社会言語学研究の年度別の推移³⁾(%)

調査時期	1994-1996	1997-1998	1999-2000	2001-2002	2003-2004	2005-2006	2008-2009	2015-2016	2017-2018	合計(%)
論文数(%)	8 (1.7)	8 (1.7)	16 (3.4)	30 (6.4)	39 (8.4)	55 (11.8)	73 (15.6)	122 (26.1)	110 (23.9)	461 (100)



〈図1〉約25年間(1994-2018)語用論/社会言語学論文数の年度別の推移(%)

〈表2〉と〈図1〉は約25年間、語用論/社会言語学分野の論文数を年度別に示したものである。この図表をみると、語用論/社会言語学分野の研究は2000年から徐々に増え、2015-2016年には100本を超える論文が発表されていることがわかる。このような結果は徐々に減っている通辞論分野の論文数を考えると反対の傾向になる。洪珉杓(2018)によると、1994-1995年に韓国日本語学論文全体の中で、統辞論の論文が占める割合は48.8%だったが、

2017年から2018年6月までの期間には21.4%に減っている。語用論/社会言語学分野だけではなく、日本語教育分野の論文もかなり増えている。このような結果をみると、韓国における日本語学研究も日本語それ自体の研究よりは日本語の使用や日本語教育のような応用言語学のほうに関心が多くなっており、〈表2〉と〈図1〉の結果もこのような傾向が反映されたものではないかと考えられる。

3.4 共同論文の現況

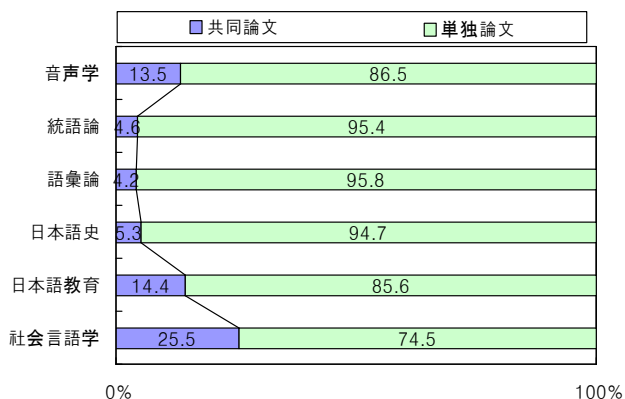
3.4.1 分野別の共同論文の割合

〈表3〉 分野別の共同論文の現況(%)

分野別	音声学 音韻論	統辞論 形態論	語彙論 意味論	日本語 史	日本語 教育	語用論 社会言語学	その他	合計 (%)
共同論文(%)	7(13.5)	8(4.6)	5(4.2)	5(5.3)	33(14.4)	28(25.5)	8(15.7)	94(11.3)
単独論文(%)	45(86.5)	166(95.4)	113(95.8)	90(94.7)	196(85.6)	82(74.5)	43(84.3)	735(88.7)
合計	52(100)	174(100)	118(100)	95(100)	229(100)	110(100)	51(100)	829(100)

〈表3〉と〈図2〉は、今期に発表された日本語学全体の論文数829本を分野別に共同研究と単独研究に分けて示したものであるが、全体的にみると、共同論文は11.3%に過ぎなく、残り88.7%は単独論文になっている。分野別にみると、音声学や通辞論、語彙論などの分野に比べて日本語教育と語用論/社会言

3) 1994-2006年の資料は李康民(2000a/b, 2002, 2003, 2005, 2008)、2008-2009年の資料は尹幸舜(2010)、2015-2016年の資料は洪珉杓(2017)から引用したものである(表6も同様)。



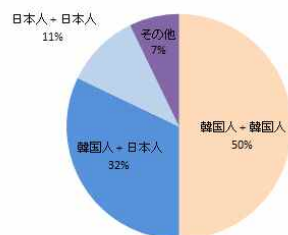
＜図2＞共同論文と単独論文の割合

語学分野の共同研究の割合が相対的に高くなっている。特に、語用論/社会言語学分野の共同研究の割合は25.5%で最も高い。このような結果からみると、洪珉杓(2018)で指摘したように韓国における共同研究は日本語教育や語用論/社会言語学のような応用言語学分野で多く行われていることがわかる。

3.4.2 共同論文著者の国籍分布

＜表4＞共同論文著者の国籍分布

国籍	人員(%)
韓国人+韓国人	14(50.0)
韓国人+日本人	9(32.1)
日本人+日本人	3(10.7)
日本人+中国人	1(3.6)
日本人+タイ人	1(3.6)
合計	28(100)



＜図3＞共同論文著者の国籍分布

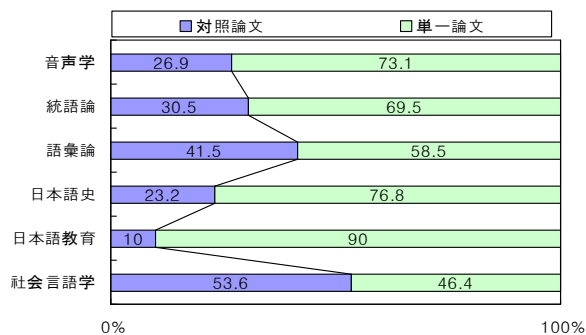
＜表4＞と＜図3＞は、語用論/社会言語学分野の共同論文著者の国籍分布を示したものであるが、この図表をみると〈韓国人+韓国人〉研究者の組み合わせが50.0%で最も高く、次いで〈韓国人+日本人〉の組み合わせが32.1%、〈日本人+日本人〉の組み合わせが10.7%となっている。この他にも〈日本人+中国人〉と〈日本人+タイ人〉による共同論文も各々1本ずつある。〈韓国人+日本人〉より〈韓国人+韓国人〉研究者による共同研究が多くなっているが、これは語用論/社会言語学分野の研究の場合、韓国人として日本人の言語行動や日本語の談話分析を行う研究が多いので、今後は〈韓国人+日本人〉の組み合わせによる共同研究がもっと活性化していくのが望ましい方向ではないかと考えられる。

3.5 対照論文の現況

3.5.1 対照論文の分野別の割合(%)

〈表5〉 語用論/社会言語学研究における対照論文の分野別の現況(%)

分野別	音声学 音韻論	統辞論 形態論	語彙論 意味論	日本語史	日本語 教育	語用論 社会言語学	その他	合計
対照論文	14(26.9)	53(30.5)	49(41.5)	22(23.2)	23(10.0)	59(53.6)	21(41.2)	241(29.1)
単一論文	38(73.1)	121(69.5)	69(58.5)	73(76.8)	206(90.0)	51(46.4)	30(58.8)	588(69.9)
合計	52(100)	174(100)	118(100)	95(100)	229(100)	110(100)	51(100)	829(100)



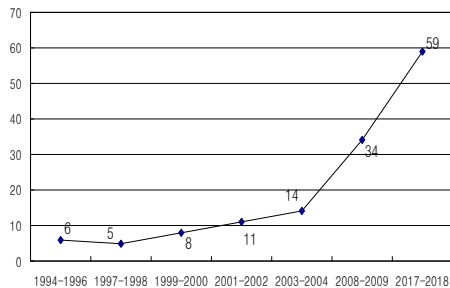
〈図4〉対照論文と単一論文の割合

〈表5〉と〈図4〉は、今期に発表された日本語学全体の論文数829本を分野別に対照研究と単一研究に分けて示したものであるが、この図表をみると、対照論文が29.1%、単一論文が69.9%になっていることがわかる。分野別にみると、対照研究は主に語彙論と語用論/社会言語学の分野で多く行っていることがわかる。特に、語用論/社会言語学分野の対照研究の割合は53.6%で最も高くなっている。〈表4〉と〈表5〉の結果からみると、韓国で共同研究と対照研究が最も活発に行われている分野は語用論/社会言語学であることがわかる。

3.5.2 対照論文の年度別の推移

〈表6〉 語用論/社会言語学研究における対照論文の年度別の推移(%)

調査時期	1994-1996	1997-1998	1999-2000	2001-2002	2003-2004	2008-2009	2017-2018	合計 (%)
論文数(%)	6 (4.3)	5 (3.6)	8 (5.8)	11 (8.0)	14 (10.2)	34 (24.8)	59 (43.1)	137 (100)



〈図5〉対照論文数の年度別の推移(%)

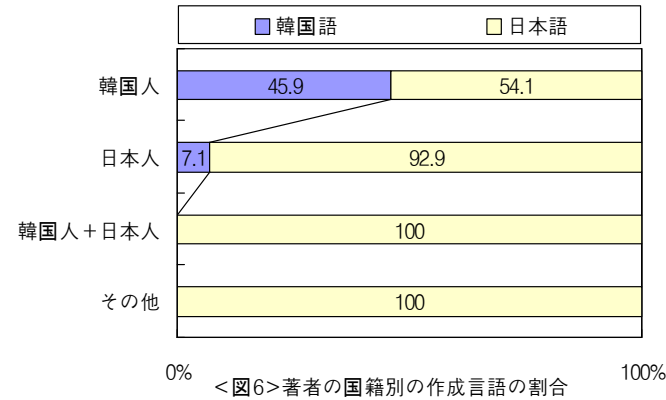
ようになったのが一つの原因ではないかと考えられる。

〈表4〉と〈図5〉は、語用論/社会言語学分野対照論文の年度別の推移を示したものであるが、この図表をみると、2008-2009年から急速に増えており、特に今期は43.1%で最も多くなっている。このような結果は異文化コミュニケーションが頻繁に行われている国際化時代を向かえ、日本語教育の現場においても言語行動や談話行動のような意思疎通能力が重視されているため、日本語と韓国語の談話分析や日本人と韓国人の言語行動の対照研究が活発に行われ

3.6 論文作成言語

＜表7＞ 語用論/社会言語学研究の著者国籍別の作成言語の割合(%)

単独 論文			共同 論文			合計(%)			
韓国人	韓国語	25	韓国人+ 韓国人	韓国語	14	韓国人 (77.3)	韓国語	39(45.9)	85
	日本語	46		日本語	－		日本語	46(54.1)	
日本人	韓国語	1	日本人+ 日本人	韓国語	－	日本人 (12.7)	韓国語	1(7.1)	14
	日本語	8		日本語	5		日本語	13(92.9)	
中国人	日本語	2	韓国人+ 日本人	韓国語	－	韓 国 人 + 日本人 (7.3)	韓国語	－	8
				日本語	8		日本語	8(100)	
			日本人+中国人 日本人+タイ人	日本語	－ 1	その他 (2.7)	日本語	3(100)	3
合計(%)		82 (74.5)	合計(%)		28 (25.5)	合計(%)		110 (100)	



＜図6＞著者の国籍別の作成言語の割合

＜表7＞と＜図6＞は、語用論/社会言語学論文の著者国籍別の作成言語の割合を示したものであるが、この図表をみると韓国人の論文作成言語は韓国語45.9%、日本語54.1%となっていることがわかる。このように、語用論/社会言語学論文を日本語で作成する割合が半分を越えていることは、たぶん談話分析や語用論などの論文は

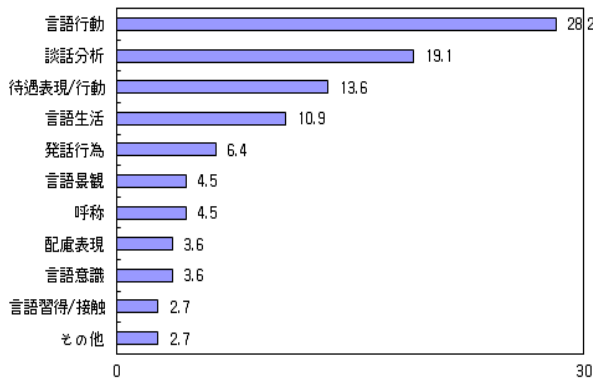
日本語の用例を分析する場合が多いので、それが一つの原因ではないかと考えられる。その他、日本人をはじめ、中国人やタイ人などはほぼ100%日本語で論文を作成している。共同論文の場合は、〈韓国人+韓国人〉の論文は100%韓国語で作成しており、他の共同論文は100%日本語で作成していることがわかった。

3.7 テーマ別の論文数

＜表8＞ 語用論/社会言語学論文のテーマ別の分類(%)

No	細部項目	論文数(%)	細部テーマ
1	言語行動	31(28.2)	誉め/謝罪行動、聞き手の言語行動、相づち、依頼/誉め行動の評価など
2	談話分析	21(19.1)	初対面の会話分析、多様な談話分析及び談話モデルの構築、談話展開の親疎差/地域差/世代差など
3	待遇表現/行動	15(13.6)	丁寧表現/敬語動詞/表現使用実態、敬語の誤用、チャットング言語分析など
4	言語生活	12(10.9)	日本語残滓の使用実態、在日韓国人/在韓日本人の二重言語生活/コードスイッチング

			など
5	発話行為	7(8.5)	チャットング発話、中途終了型発話、不同意・不一致発話の分析など
6	呼称/指称	5(4.5)	配偶者言及/兄弟姉妹呼称/トーク番組の呼称分析など
7	言語景観	5(4.5)	観光地案内板、交通表示板など
8	配慮表現	4(3.6)	日本語の配慮表現、politenessなど
9	言語意識	4(3.6)	言語イメージの日韓比較、丁寧さの認識など
10	言語習得/接触	3(2.7)	帰国子女、在韓日本人の中間言語分析など
11	その他	3(2.7)	集団語、方言、翻訳、役割語、など
	합계	110(100)	



〈図7〉語用論/社会言語学論文の細部テーマ(%)

〈表8〉と〈図7〉は、110本の語用論/社会言語学論文をテーマ別に分類したものであるが、この図表をみると「言語行動」と「談話分析」に関する論文がほぼ半分ぐらゐを占めていることがわかる。次は丁寧表現や敬語使用実態などを扱っている「待遇表現/行動」が13.6%となっており、4位は日本語残滓の使用実態、在日韓国人/在韓日本人の二重言語生活、コードスイッチングなどを扱っている「言語生活」が10.9%を占めている。また、チャットング発話、中途終了型発話などを

扱っている「発話行為」が8.5%、観光地案内板や交通表示板などを調べている「言語景観」と配偶者言及やトーク番組の呼称などを分析している「呼称」に関する論文が各々4.5%を占めている。この他にも、日本語の配慮表現やポライトネスなどを扱っている「配慮表現」、言語イメージの日韓比較、丁寧さの認識などを扱っている「言語意識」、帰国子女、在韓日本人の中間言語分析などを扱っている「言語習得や接触」「集団語」「役割語」などに関する論文が見られる。以下では、各テーマ別の論文をいくつか取り上げて紹介する。

3.7.1 言語行動

今期に発表された言語行動の論文は誉め行動と謝罪行動が多く見られる。まず、誉め行動に関する論文としては初対面の会話を録音して分析した李恩美・権景愛の「日韓両国の女子大学生の初対面の会話に見られる誉め行動」(日本語学研究 53)と李恩美「日韓両国の大学生の初対面の会話に見られる誉め行動-性差に注目して」(日語日文学研究 103-1)、そして日本映画4本とドラマ4本を分析した이정희の「日本語ほめ表現の男女差-politenessの観点から」(日本近代学 55)などが見られる。謝罪行動に関する論文としては、ロールプレーやアンケート調査から得られたデータを分析した鄭賢児の「負担度の高い場面での『謝罪・応答発話文』の日韓対照」(日本語学研究 56)と鄭賢児「謝罪行動」の相互作用の結果に

対する韓日対照研究：韓日男性母語話者を研究対象にして」(日本語教育研究 40)、持田祐美子「日韓の関係修復行動としての謝罪に関する一考察」(日本語学研究 55)などが挙げられる。

次に、聞き手の言語行動と言語行動の評価、そして相づち行動に関する論文が多く見られた。聞き手の言語行動に関する論文としては韓国と日本のトーク番組司会者とゲストの会話を分析した林始恩の「聞き手の反応に関する日韓比較-トーク番組の司会者の発話を中心に-」(日本言語文化 43)と李舜炯の「韓国人日本語学習者の聞き手言語行動のメカニズム」(日本学報 115)などがあり、言語行動の評価に関する論文としては金知垠の「話しかけへの応答からみるマイナス評価表出の日韓比較」(日本語学研究 54)と張允娥の「日韓語の友人同士の会話における不同意・否定的評価の対象-ポライトネス理論の観点から-」(日本言語文化 42)がある。相づち行動に関する論文としては日本人母語話者2名と韓国人日本語学習者2名の30分間の会話を分析した全鍾美の「時間の経過に伴った自己開示の変化：日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話を対象に」(日語日文学 76)と初対面の韓国人と日本人の電話での会話を録音し、分析した朴成泰の「日韓接触場面におけるあいづちの分析」(日本語文学 74)や韓国人日本語学習者と日本人母語話者の初対面の自然談話を録音して分析した李舜炯の「韓国人日本語学習者の接触場面における発話交替時と発話途中のあいづち的反応の機能と表現形式」(日本文化研究 66)などがある。この他にも以下のような言語行動に関する論文が見られる。

元智恩の「日韓の恋愛における告白の言語行動」(日本語文学 78)

中村有里他 2人「親しい友人にものを借りる場面の日韓比較」(日本語学研究 54)

中村有里他 2人「親しい友人にものを借りる場面の日韓比較 一借りやすさ・借りにくさに焦点を当てて」(日本語教育研究 42)

鄭榮美「受諾に対する日韓対照研究-依頼行動に対するアンケート調査を中心に」(日語日文学研究 105-1)

張相彦「新しいメディア(SNS)による言語行動研究-大学生を対象にしたアンケート調査を中心に-」(日本文化研究 65)

羅希「相づちの[促し]効果の消失について-現代日本語の[うん][はい]と現代中国語の天津方言の[ng][a]の比較から」(日本近代学 研究 59)

3.7.2 談話分析

談話分析に関する論文は、日本人筆者のドラマ視聴と韓国人筆者の日本人の結婚式の参席から感じられた違和感を分析した沖裕子・姜錫祐の「日本語の談話構築態度：日韓相互の情緒的違和感を説明するモデルの検討」(日本語学研究 55)や小説、講演集、対談集の三冊の談話を分析した鄭恵卿の「日本語における「心話文」の表現形式と類型」(日本言語文化 39)などが挙げられる。また、突然的な約束取り消しに関する内容をメールで書かせ、それを分析した金光泰の「韓日約束取消し行為の談話構造及び談話ストラテジー」(日本言語文化 43)や金アランの「親密度と談話展開様相に関する一考察-意見不一致の場面を中心に-」(日本文化学報 77)も注目に値する。最も多く見られる談話分析のテーマは以下のような初対面の会話分析である。

全鍾美「初対面会話にみられる不同意表明の日韓対照研究」(日語日文学 78)

李善玉「韓日異性間の母語話者同士の初対面の会話研究-話題内容を中心に-」(日本言語文化 39)

-----「韓日異性間の母語話者同士の初対面の会話研究-話題提示方法及び話題導入の社会的要素を

中心に-」(日本語教育研究 38)

張良光「初対面自由会話における話題展開分析-予め共有している情報からはじまる話題展開を中心に-」(日本語教育研究 43)

この他にも韓国と日本映画のシナリオと日本人4名と韓国人4名の自由会話を分析した金アランの「非丁寧体の会話におけるアップシフトに関する日韓対照研究」(日本文化学報 72)や質問と話題を提示して調査対象者の説明を録音して分析した琴鍾愛の「大阪方言の談話展開の方法の世代差」(日本語文学 80)などがある。特に、琴鍾愛の論文は60歳以上の高齢者と2,30代の若年層の談話展開の違いを確認したことに意味がある。また、東京出身4名、大阪出身4名、仙台出身10名を対象に若年層の説明的談話を分析した琴鍾愛の「若年層における談話展開の方法の地域差」(比較日本学 40)と차소영・李銀美の「日本人大学生の友だち同士の会話に見られる「さ」の使用様相」(日本研究 72)(韓国外大)、そして在美日本人2世4名に筆者が10個質問を提示して応答者の説明(談話)を分析した琴鍾愛の「談話標識の出現傾向からみた在米日本人2世の談話展開の方法-東京若年層話者との比較をととして-」(日本語文学)76なども見られる。

3.7.3 待遇表現

待遇表現に関する論文は、まず2012年から毎年視聴率1位を記録したドラマを7本を分析し、誤用として扱われている敬語表現の実態はその解釈上の問題を話者の認識に基づいて再解釈した白同善の「ドラマを通じてみた敬語の誤用分析」(日本文化研究 67)が挙げられる。また、SNS(Kakao Talk, Line, Facebook/奥田2016)の資料を分析した奥田亜未「日本人女性のチャットに見られる待遇表現の使用様相」(日本語教育研究40)とTwitterと国会議事録から読む、書く、聞く、帰るなど四つの五段活用動詞の尊敬語の形と頻度調査を行った魚秀貞の「Twitterと国会会議録における敬語の形と使用頻度」(日本語文学 79)、衆議院・参議院の議事録を分析した李讓珍の「「いたす」から「させていただく」への交替-国会会議録検索システムを資料として-」(日本言語文化40)、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』KOTONOHAを用いて1976-2005年までの書籍や国会議事録に使われた「させていただく」を五年単位で検索した김용각の「日本人のさせていただく使用実態に関する考察」(日本語教育82)のようなSNSや国会議事録を分析したものも多く見られる。また、日本語新共同訳四つの福音書を分析した리성규の「発話動詞〈言う〉の尊敬語の使用実態-日本語口語訳新約聖書を対象として-」(日本言語文化43)、日本小説八冊と韓国語翻訳書八冊を分析した한원형の「てくださいに関する一考察-韓国語訳の多様な待遇度を通じて」(日本学報113)、ドラマシナリオ四作品の会話を分析した金修卿の「テクレルのマイナス待遇化に関する一考察-非恩恵表現を中心に」(日語日文学研究105-1)、そして辛昭静・石崎雅人の「依頼場面における丁寧表現の使用/不使用に影響する要因の分析-日本人と韓国人の比較を通して-」(日本学研究52)、金東奎の「言語行動の「丁寧さ」に対する認識 - KJ法による質的データの分析・考察 -」(日本言語文化4)などが発表された。

3.7.4 言語生活

言語生活に関する論文は、筆者が直接録音した33人のインタビュー音声録音資料をコーパスで作成して分析した孫榮奭の「在日韓国人の二重言語使用者たちの「-스」 「-하다」の使用実態研究-音声コーパスを資料にして-」(日本学報115)、Trip advisor Siteである〈東京・飲食店〉〈ソウル・飲食店〉欄

の上位ランキングに対する日本、韓国人観光客の評価を分析した大谷鉄平の「韓日対照打ち言葉研究への試論-ロコミサイト投稿記事を対象とした質的調査を中心に」(日本語文学72)などが挙げられる。また、1年以上の韓国在住の日本語母語話者10組20名の2人自由会話を録音、分析した松樹亮子の「韓国在住日本語母語話者の日本語会話に現れる韓国語のコード・スイッチング-形式的特徴を中心に」(日語日文学研究104-1)と在韓日本人妻4名をインタビューした朴良順の「在韓日本人妻の韓国語を基盤にしたコード・スイッチングの実態」(日本研究)(中央大44)、また韓国在住の日本語母語話者の会話場面での韓国語の使用実態を分析した松樹亮子の「在韓日本語母語話者の日韓コード・スイッチング」(日本文化学報78)のようなコード・スイッチングに関する論文が発表された。言語生活に関する論文の中で最も多いテーマは、以下のような韓国語に残存している日本式の漢字語と日本語の使用実態である。

李徳培「韓国語に残存する日本語の実態」(日本語文学72)

李徳培・안동미「50-60代韓国人の日本式の漢字語の使用実態及び認識に関する考察」(日本語教育79)

李徳培・정보희「10代・20代の日常言語に残存する日本式漢字語」(日本語教育82)

李徳培・이연희「70-80代の韓国人の日本式漢字語使用実態及び認識」(日本語教育83)

洪珉杓「日本語残滓の使用実態に対する社会言語学的研究」(比較日本学39)

3.7.5 発話行為

発話行為に関する論文は、韓国と日本のKakao TalkとLineのチャットング資料を分析した奥田亜未の「方言シフト現象から見る韓・日チャットング発話スタイル」(日本語教育研究42)、日本ドラマ「白い巨」 「花より男子」とこれを韓国語で翻案、製作した「白い巨塔」 「花より団子」を分析した元智恩の「日韓のテレビ・ドラマに用いられたポジティブ・ポライトネス」(日本近代学研究60)、문양수의「韓国と日本高校生の依頼発話行為の対照研究」(日語日文学74)などが挙げられる。

3.7.6 言語景観

言語景観に関する論文は、大邱City Tourバスの循環コース、中区Tourコースの観光地の観光案内板、案内文、説明文などの写真資料を言語景観の観点から分析した趙恩英の「大邱広域市の観光地に見られる言語景観について-都心循環コースと近代文化路地の表記を中心に-」(日本文化研究64)、釜山公園の案内板や交通表示板の多言語表記実態を分析した趙恩英の「釜山広域市の観光地における言語景観について釜山シティーツアーのコースにある公園を中心に」(日本近代学研究61)、また韓国の商業施設、公共施設の看板、掲示板の写真資料を分析した김정현の「言語景観に見られる誤用に関する研究-看板と掲示板を中心に-」(日本近代学研究55)、堺港の商店名、公共施設名などの言語景観に与えた妖怪物語の影響を分析した이정희の「言語景観でよみがえった妖怪物語」(日本語文学82)などが挙げられる。

3.7.7 呼称

呼称に関する論文は、まず夫婦間の言語使用を両性不平等の観点から調べた洪珉杓の「配偶者の言及に対する韓日対照研究」(日本研究 44)(中央大)や出生率低下に伴う家庭内の呼称実態を調べた洪珉杓の「兄弟姉妹の呼称に対する韓日対照研究」(比較日本学 42)が挙げられる。また、ポジティブ・ポライトネスとして使われたテレビドラマの呼び掛けを分析した元智恩の「日韓のテレビ・ドラマに用いられた呼びかけ表現」(日語日文学 79)、韓国と日本のトーク番組での呼称実態を調べた백이연・朴孝庚の「韓

日間の呼称語の対照研究： 集団トーク番組を中心に」(日本語学研究 51)、選挙街頭演説文を分析した韓娥凛の「日韓の政治談話における「呼びかけ」の使用傾向と談話機能」(日本語学研究 52)などが発表された。

3.7.8 配慮表現

配慮表現に関する論文は、日本ドラマ10本を対象に主語の意志によって日本語配慮の類型と意味的な特徴と話し手と聞き手との関係について分析した공미희・孫東周の「日本語の配慮表現に関する考察- TVドラマの分析を通じて-」(日本語文学76)や日本小説二冊と韓国語繙訳本を対照分析して使用者の視点が、事態の言語化の際、主観/客観どちら寄りのスタンスを選択するのか、という観点から両語の視点と主観性の関係を明らかにした鈴木梓の「配慮表現としてのテミルと아/어 보다-待遇表現としてのテ形補助動詞における間主観性-」(日本語教育82)などが挙げられる。

3.7.9 言語意識

言語意識に関する論文は、韓日両国人2,964人を対象に相手国のイメージ形成に影響を与える要因と相手国、人、言語に対する好感度を調べた金庚芬他7人の「日本と韓国の相手国・人・ことばに対する好感度及び形成要因について」(日本語学研究53)と日本人1,696人を対象に韓国の国、人、言葉に対するイメージを自由記入式で調べた関崎博紀他2人の「日本人が抱く韓国の国、人、言葉に対するイメージ」(日本語学研究54)などが挙げられる。これらの論文はかなり大規模のアンケート調査を行い、調査結果の信頼性や客観性を高めている点で注目に値する。

3.7.10 言語習得/接触

言語習得や接触に関する論文は、盧姓鉉の「在韓日本人一世と二世の二言語習得と二言語接触状況-二言語併用能力との関わりから-」(日本語教育研究54)や2006年9月から2011年8月まで約5年間にかけて姉妹二人の韓国-日本-韓国での言語生活を追跡録音して分析した黄永熙の「韓国人帰国生日本語の可能表現からみる第二言語接触史」(比較日本学42)などが挙げられる。

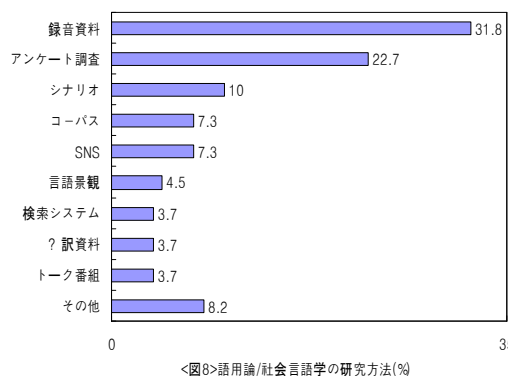
3.7.11 その他

集団語に関する論文は、四つの新聞社の使用用例と大学生を対象に行ったアンケート調査結果を分析した최정희の「韓国大学生の「간지나다」使用様相に関する社会言語学的考察」(日本語教育83)や現代日本語の「若者言葉」と「打ち言葉」(比較日本学 44)などがある。方言に関する研究としては、東北方言と韓国語の時間表現を対照した津田智史・梁敏鎬の「東北亜海域の言語地理学研究-日本語東北方言の地域性と韓国語との対照-」などがある。また、役割語に関する論文としては日本のアニメキャラクターたちが繰り出すキャラ語尾について調査し、それに対応する韓国語の音声ダビング版ではどのように翻訳がなされているのかについて分析を行った郭銀心の「アニメキャラクターが使用する日韓の「キャラ語尾」に関する研究-日本語原作版と韓国語ダビング版の比較を中心に-」がある。

3.8 研究方法

〈表9〉 語用論/社会言語学分野の分析資料

No.	分析資料	頻度(%)	細部資料	研究分野
(1)	録音資料	35(31.8)	自然談話、自由会話、role play、電話、インタビューなど	談話分析、初対面の会話分析、言語習得/接触、コード・スイッチング、相づちなど
(2)	アンケート調査	22(22.7)	アンケート調査	言語意識、言語行動、言語生活、呼称/指称、好感度、集団語など
(3)	シナリオ	11(10.0)	映画、ドラマなど	配慮/婉曲/告白/誉めなど
(4)	コーパス	8(7.3)	KYコーパス、音声コーパスなど	談話分析、初対面の会話、中間言語など
(5)	SNS	8(7.3)	Twitter, Kakao Talk, Line, Face Book、ロコミなど	発話スタイル、待遇表現/命令表現、チャットिंग言語分析など
(6)	言語景観	5(4.5)	観光地案内板、交通標識など	言語景観
(7)	検索システム	3(3.7)	国会議事録、KOTONOHAなど	敬語の使用頻度など
(8)	翻訳資料	3(3.7)	韓日小説対訳本など	待遇表現/配慮表現など
(9)	トーク番組	3(3.7)	集団トークショーなど	呼称、聞き手の反応など
(10)	その他	9(8.2)	演説文、Eメール、教材、打ち言葉、聖書など	翻訳、役割語、談話分析など
合計		110(100)		



〈表9〉と〈図8〉は、今期に発表された語用論/社会言語学分野論文の分析資料を調べ、分類したものである。この図表をみると、録音資料とアンケート調査結果を分析したものがほぼ半分を占めていることがわかる。これを分野別にみると、語用論や談話分析の論文は録音資料やシナリオ、コーパスを用いたものが多く、社会言語学分野の論文はアンケート調査やSNSの資料を用いたものが多い。これ以外にも敬語使用実態は国会議事録やKOTONOHAのような検索システムを多く用いてお

り、待遇表現や配慮表現の研究は韓日小説や映画、ドラマの対訳本を多く用いていることがわかった。また、言語景観は観光地案内板や交通標識板を多く用いており、呼称や聞き手の反応などは集団トークショーやアンケート調査結果を多く用いて研究を行う傾向がある。

4. まとめ

本稿は、2017年1月から2018年12月までの2年間韓国研究財団に登載されているの18の専門学術誌に発

表された110編の語用論/社会言語学分野の論文を調べ、それを量的、質的に分析し、韓国における最近の研究動向を把握したものである。調査及び分析の結果、今期の語用論/社会言語学分野の研究現状をまとめると以下ようになる。

まず、語用論/社会言語学分野の研究は他の分野に比べて共同研究や対照研究が活発に行われている、という特徴がある。これは大変望ましい方向であり、今後さらに共同研究や対照研究の論文を増やしてほしいものである。次に、語用論/社会言語学分野の研究テーマは談話分析や言語行動(初対面の会話分析、聞き手の言語行動など)が多く、分析資料としては、録音資料、アンケート調査結果、映画やドラマのシナリオ、SNS(Twitter, Kakao Talk, Line, Face Book、ロコミ、など)やコーパス、対訳資料、トーク番組などが多く使われている。最後に語用論/社会言語学分野の新しい研究として配偶者間の呼称や言語使用を両性不平等的な観点から分析しているものが見られており、言語景観やロコミの分析、打ち言葉(顔文字、絵文字、携帯電話のメッセージ、チャット、SNSなど)の分析が多く見られる。また、語用論/社会言語学論文の場合、韓国人の論文作成言語は韓国語(45.9%)より日本語(54.1%)で作成する割合が高いことが分かった。

【参考文献】

- 尹幸舜(2010)「海外における日本語研究」『日本語の研究』6(3) 日本語学会 pp.120-125
- 李康民(2000a)「韓国における日本語の研究(1994～1996): 専門学術誌の研究動向」『比較日本学』8 漢陽大日本学国際比較研究所 pp.85-109
- _____(2000b)「韓国における日本語の研究(1997～1998): 専門学術誌の研究動向」『日本学報』45 韓国日本学会 pp.147-162
- _____(2002)「韓国における日本語の研究(1999～2000): 専門学術誌の研究動向」『日本学報』52 韓国日本学会 pp.69-90
- _____(2003)「韓国における日本語の研究(2001～2002): 専門学術誌の研究動向」『日本学報』55 韓国日本学会 pp.117-141
- _____(2005)「韓国における日本語の研究(2003～2004): 専門学術誌の研究動向」『日本学報』64 韓国日本学会 pp.409-430
- _____(2008)「韓国における日本語の研究(2005～2006): 専門学術誌の研究動向」『日本学報』74 韓国日本学会 pp.427-450
- 洪珉杓(2010)「社会言語学の現況と可能性」『日本語学研究』28 韓国日本語學會 pp.31-47
- _____(2016)「日本社会言語学の研究動向」『社会言語学』24(1) 韓国社会言語學會 pp.311-336
- _____(2017)「韓国日本語学研究の現況と展望」『日本語学研究』51 韓国日本語学会 pp.5-8
- _____(2018)「韓国日本語学の研究現況と課題」『日本研究』78 韓国外大日本研究所 pp.27-46
- 洪珉杓他(2010)『現代日本語学入門』(荻野綱男編著『現代日本語学入門』)韓国文化社

〈요지〉

화용론·사회언어학 연구의 현황과 전망

본고는 2017년1월부터 2018년12월 사이에 한국연구재단에 등재되어 있는 18개 전문 학술지에 발표된 110편의 화용론/사회언어학 분야 논문을 분석하여 최근 연구동향을 파악한 것이다. 조사 및 분석 결과, 화용론/사회언어학 분야의 연구는 다른 분야에 비해 공동연구(25.5%)나 대조연구(53.6%)가 활발히 이루어지고 있는 것으로 나타났다. 그리고 이 분야의 연구주제는 담화 분석이나 언어행동(첫 대면의 대화분석, 청자의 언어행동 등) 등이 많고, 특히 최근의 연구로서 언어 경관이나 댓글(口コミ) 분석, 입력언어/打ち言葉(얼굴문자, 그림문자, 휴대전화 메시지, 채팅, SNS 등)의 분석이 많은 것으로 나타났다. 분석 자료로는 녹음자료, 설문조사결과, 영화나 드라마의 시나리오, SNS(Twitter, Kakao Talk, Line, Face Book, 인스타그램 등)나 코퍼스, 번역자료, 토크프로그램 등이 많이 사용되고 있다. 화용론/사회언어학의 경우, 한국인의 논문 작성언어는 한국어(45.9%)보다 일본어(54.1%)로 작성하는 비율이 높은 것으로 나타났다.

주제어 : 화용론, 사회언어학, 대조분석, 담화분석, 연구현황

■ 홍민표(洪珉杓)

계명대학교 교수

hmp@kmu.ac.kr

■ 投稿日 :	2018년	12월	31일
■ 審査開始 :	2019년	1월	14일
■ 審査完了 :	2019년	2월	10일
■ 掲載確定 :	2019년	2월	11일